

イニス、マクルーハンのメディア・コミュニケーション理論の位置 (II)

——マス・コミュニケーション研究を照射する鏡として——

香 内 三 郎

目 次

- 第一章 多様な「空間」の探求——「視覚空間」から「聴覚空間」へ——
- 第二章 『メディアを理解する』へいたる途——感覚「割合」の罫——
- 第三章 60年代の知的情況のなかでの位置——スノーとゾンタークを引照枠として——
- 第四章 「文芸批評」でのノースロップ・フライとの交渉——「クリーチェ」と「アーケタイプ」の転換様式——
- 第五章 「擬似環境論」の批判と「視点なし」の立場——一つのエポックの終り——

第一章 多様な「空間」の探求——「視覚空間」から「聴覚空間」へ——

かつて1968年5月の運動に触発されて雑誌『空間と社会』を出していたアンリ・ルフェーブルは、大著『空間の生産』（斎藤日出治訳、2000年、青木書店）の第三版序文で、次のように述べていた。

「空間を、もはや受動的なものとして、からっぽのものとして考えることはできない。空間は『生産物』と同様に、交換され、消費され、消滅する以外の意味をもたない。空間は生産物として、相互作用や反作用を通して、生産それ自体に介入する¹⁾。」（同上書、7頁）といい、その概念は「定式化」されたものの、まだ「解明」されてはいない、と診断していた。ここで、その「解明」を試みようというのではないが、二〇世紀初頭の、伝統的な絶対・等質空間が崩れて行く過程は、マクルーハンの位置づけのためにも、若干みておく必要がある（第一章）。第二章は『メディアを理解する』にいたる軌跡と、その「メディウム理論」を扱い、以下キュービズムではないが、いくつかの角度からマクルーハンに照明をあてることで、かれの立っていた位置を浮び上らそうと試みた。第三章は、主として60年代の知的問題情況のなかでのマクルーハンを対象にし、第四章で、ノースロップ・フライの「文芸批評」との対立、第五章で「擬似環境論」の批判を扱う、という構成になる。

二〇世紀初頭、ニュートンの等質的な「絶対空間」、カントの認識の基本形式（時間、空間）、

という図式を崩してゆくのは、アインシュタインの相対性理論と、ユークリッドとは別の、リーマン幾何学の発展であろう²⁾。決定的な役割を演ずるのはそちらであろうが、ここでは、人文・社会科学、芸術の分野に素描をかざしておく。

と、広い意味での「空間」概念の多様化にもっとも貢献しているのは、やはりデュルケームとその社会学であろう。デュルケームは社会的諸関係は、人間理性に内在する「論理関係」に基づくとしたジェームス・フレーザーを批判して、論理のカテゴリーの前に、社会的カテゴリー、「空間」もその一つ、があることを力説（「未開人の分類法」）した。デュルケームはその例として、ズマ（“Zum”）インディアンを取上げる。かれらは「空間」を7つの領域に分け、社会的経験を整理している。北、南、東、西、頂点、どん底、中心である。そして、各々の方向にすべてのものが所属することになっていた。風と空気は北に、水と春は西に、火と夏は南に……という具合にである。それは「種属の居場所が現実の限界をこえて、無限に拡大されたものに他ならない。」

「空間」は社会ごとに違い、異質な存在だということが、強調されたのである。『宗教生活の原初的形態』のなかでも、同様の記述は、いくらでも見つけることが出来る。デュルケームのように説明の論理体系を呈示しているわけではないが、シュペングラーのベストセラー、『西欧の没落』も、各文明は独自の「空間」感覚（同様に「時間」感覚）をもっていることが前提として記述されており、「空間」概念の変容に、大きく貢献しているのかと思われる。デュルケーム的認識は、以降文化人類学の共通財産となって、エドワード・ホールまで来るとみてよい。マクルーハンの「空間」論が、この系譜に多くを負っているのは事実であるが、若干の留保も必要であろう。

それは、デュルケーム「社会学」の位置づけにかかわる。1902年、第三共和制の下でデュルケームがソルボンヌに「社会学」を導入して以来、それが「文学教養」に基礎を置いた、伝統的知識人像を破壊するものとして、激しく攻撃されたからである³⁾。古典ヤルソー、ヴォルテールに精通した、人生万般に応用のきく「教養人」を育てないで、未開人の「思惟」を教えるとはなにごとか、という批判である。「社会学」（デュルケームの雑誌、*Année Sociologique*）はそれらの潮流と抗争しながら、定義して行かなければならなかったわけだが、そこには、同じく社会学（社会心理学と言った方がいいか）者であったガブリエル・タルドの影も、からんでいた。メディアの発達と理性的公衆の増大とを等置した、マス・コミ論の古典、『世論と群集』を書いたあのタルドである。タルドは1904年に死ぬが、その時コレージュ・ド・フランスの現代哲学の講座を担当していた。後任はベルクソンである。そのためかどうか、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』には、デュルケーム・モースへの批判が見えかくれしているが、それはともかく、タルドもまたデュルケーム「社会学」に批判的だったのである。端的に言って、半分は「文学的教養」派に同調していたのである。と言うより、タルドの半分は文学者だったといったほうがよいだろう。

タルドは1876年、ある社会学雑誌に「社会的ファンタジー」として、「未来の歴史の断片」と題する、ユートピア小説を発表しているからである⁴⁾。後にわれわれはイギリスで、相似た現象に出会うことになる。この小説、なかなか面白い内容であるが、ここでは二〇世紀初めの「文学」と「社会学」とのからまりを見ておけば、よいであろう。

「空間」概念の動揺は、哲学、生物学の分野でも起きる。いろいろな「主観的」空間がありうることは、すでに世紀の初め、アンリ・ポワンカレーが指摘していたが、「空間」感覚の由来が、われわれの身体にあることを体系化したのは、やはりエルンスト・マッハである。マッハは「視覚的」「聴覚的」「触覚的」空間が、身体内部の異った感覚系によるものであることを力説した。マッハによれば「表面の観念」は、われわれの「皮膚の経験」から来ているのである⁵⁾。

生物学で同方向の仕事をあげるならば、戦前、清水幾太郎が「環境論」で巧みに使っている、ヨハネス・フォン・ユクスキュルの『原世界と動物の内部世界』であろう。あらゆる異った感覚系を持つ生物に対して、同一の「物」はない。ハエの世界には「ハエの物」があり、ウニの世界には「ウニの物」がある。人間の世界も同様だ、ということになる。これはアメイバーが空の輝く星を見ることが出来ないのと同様、われわれ人間にも認識することが出来ない異世界が存在する、という想定にも導くが⁶⁾、それはともかく、マクルーハンの理論的系譜の発生が、このマッハ-ユクスキュルの線上にあったことは、明らかであろう。

ここで、日本の30年代を分析するのに避けて通れない、マッハ、あるいはそれに同調するボグダーらを激しく批判した、レーニンの『唯物論と経験批判論』がある⁷⁾。ほとんど党の「綱領」を認める以外のことはなにも要求せず、宗教はなんであってもよく、世界観の統一を求めないほど「大衆化」していたドイツの社会民主党に対する反撥もあってか、レーニンは、「経験批判論」をマルクス主義・唯物論の哲学的基礎をゆるがすものとみて、猛烈な反撃に出たのである。レーニンはここで、時間と空間は認識の基本形式だとするカントまで批判するほど「絶対空間」を擁護しており、ここでのレーニンは、かぎりなく啓蒙期の唯物論者に接近している。これが30年代の日本で「哲学のレーニンの段階」として、威力を揮うことになる。

しかし、最も大きく一般の「空間」観を変えたのは、絵画の新様式と映画という新しい媒体の出現であろう。十五世紀にフロレンスの画家、レオン・バッティスタ・アルベルティが定式化したとされる「パースペクティヴ」の法則は、長い間ヨーロッパの絵画を支配して来たが、セザンヌで大分崩れ、ピカソやブラックのキュービズムに至って頂点に達することになる⁸⁾。同時に映画は、新しい「空間」操作の可能性を開拓した。伝統的な演劇の観客は、一つの角度、一定の距離からしか、舞台を眺めることができない。パースペクティヴ、したがって「空間」は一つしかないのである。映画のカメラは自由に角度、対象との距離を変えて動くことが出来た。そして、カメラの構成する多様な「空間」は、更にフィルムを編集す

ることで操作を可能にする⁹⁾。キュービストは、この手法も充分に取入れ、対象を前から、横から、後ろから……多様な視覚をキャンバスの上に再現したばかりではなく、「X-光線的視点」、レントゲンで肉体の内部を透視する視線まで、そこに入れたのである。

マクルーハンは、すでに1959年、エドワード・S・モルガンにあてた手紙で、次のように言っていた。

「百年ほど前に、絵描き連中は絵画的空間、パースペクティブの空間、かれらはそれを閉じた空間とよんだが、を捨て、かわりに『自己変形する』(“automorphic”)な空間をつくった。」

「オートモルフィック」とは一種の造語であるが、マクルーハンの説明によれば、「われわれが自然に入って行く、われわれが構成するものである。」、ということになる。無論、マクルーハンのキュービズム評価は異常に高い。「キュービズムは、内部と外部、頂点、底辺、背後、前面、それから残りを、二次元にあらわすことによって、パースペクティブの幻想を脱落させ、かわりに全体を一瞬のうちに、感覚的に意識させる。」(『メディアを理解する』)。

力点は末尾にあり、「全体」をパッと「意識」させること、つまりキュービズムが、エレクトロニクス・メディア時代の基本的分析方法だ、といっているのである。マクルーハンは元来折衷的(“eclectic”)であるが、「産業社会」の生活批判が「メディア」「技術体系」の批評に移行して行くのは自然の成行にみえるが、その跳躍には若干の契機がある。その一つが、かれがセント・ルイス時代に強い影響を受ける。ルイス・マンフォードではないかと思える、マンフォードの1934年の本、『技術と文明』である¹⁰⁾。マンフォードは「蒸気機関」を基軸にした産業文明の第一段階と、「電気」を軸にした第二段階とを、はっきり区別した。「電信」と「電話」によって、ほとんど即時に世界をつなぐ、コミュニケーション・ネットワークが形成される。マンフォードは、このコミュニケーション・ネットワークが、社会の脱中心化を促進し、巨大な都市や工場を解体し、かつての農村に似たコミュニティに基礎を置いた、一種の「アーティスト・アーティザン」社会の復活を夢みていた。マクルーハンは「電気」のつくり出すネットワークを、積極的に評価するところは、マンフォードゆずりだと思われるが、同時にそのルソーじみたユートピア・イメージには同調せず、エレクトロニクスの時代にふさわしい、新しい形態を探っていることに、注目すべきだろう。

もう一人、マクルーハンは甚大な影響を受けたのは、ジークフリード・ギディオンである。スターンとの対話で、その本『空間、時間、そして建築』に出会ったことが、「私の生涯における偉大な出来事だ。」とまで言っていた。この、チューリッヒにおけるジェームス・ジョイスの友人と言えよいか、美術史家ヴェルフリンの弟子と言えよいか、ルフェーブルも「空間の歴史」の探求者として高く評価しているこの男、ある側面では見分けがつかぬほど、マクルーハンは合体していることを、ここでは指摘しておこう。一つだけマクルーハンの言葉をひいて置けば、ギディオンは「環境」を「構造的な芸術作品」とみ、「街路に、

建物に、空間形態の綴り方に、言語をみていた。」それはマクルーハンの理想でもあった。

マクルーハンは、すでに『ゲーテンベルクの銀河系』の時期に、次のように言っている。「アルファベットの発明は、車の発明と同じく、複雑な、有機的な諸空間の相互作用を、一つの空間に翻訳、あるいは還元してしまった。表音アルファベットは、同時にすべての感覚を使ったオーラル・スピーチを、単なる視覚的コードに還元してしまった。……今日では、そうした翻訳が、われわれが『コミュニケーションのメディア』とよぶ多種多様な空間形態の使用を通して、後へ前へと効果をおよぼしている。」

マクルーハンにとって、一つの「空間形態」の使用が「メディア」とみなされていることに注意しなければならない。かれの「メデイウム」理論を支える二つの柱、かなり融合しているから一つとした方がよいのか、「空間形態」の探求と、人間内部の感覚バランス論とが、もうこの時点から結びついていたと言うことである。すでに、マクルーハンは1953年の「リテラシーのない文化」で、「そのコミュニケーション・システムでも基本的に必要とされることは、流れが円を描いて循環することだ。……そのことは、なぜ人間のダイアログが、すべての文明の基本形式でなければならないかを説明する。なぜなら、ダイアログはおのおのの参加者に、自分のビジョンを、他人の感覚を通して、見て、再創造するように強いるからである。」と書き、イニスとほぼ同じような「対話」モデルを原基にすえた、コミュニケーション図式を考えていた。マクルーハンは、オーラル・コミュニケーションの特徴を多分に包攝する「聴覚空間」の概念が、イニスの「対話」モデルを畳み込んでいる、と置いていたに違いない。それにしても、イニスがあればほど気にしていた「対話」は、現代の社会で、減っているのか、増えているのか。それを計る尺度を、私は持っていない。「活字文化」の「視覚空間」と「電子メディア」の「聴覚空間」という二項対置図式は判ったが、マクルーハンは、その「空間」になにを盛りこもうとしていたのか。

マクルーハン自身は、かれの「聴覚空間」の構想について、次のように語っている。

「私は、聴覚空間という概念に始めて出会った時のことを、ありありと覚えている。ジャククリーン・ティルウィット (Jacqueline Tyrwhitt) 教授は……われわれの文化とコミュニケーションに関するトロント・セミナーの一員であった。かの女は、ジークフリード・ギディオンの、閉じた空間と開いた空間を区別する、最新の学説を説明していた。ギディオンは、『建築の始め』以来、この問題に照点をあてている。ティルウィット教授は、エジプトの空間とローマの空間と対比して説明するギディオンのしたがいながら、暗黒が空間に対してもっている関係は、沈黙が音(言語の)に対してもっている関係と同じであるから、ピラミッドはどの空間も閉じてはいないという点を強調した。……ここで心理学者のカール・ウィリアムスが……入ってくる。かれは閉鎖されない空間は、もっともよく聴覚的、あるいは耳の空間として考えられることを観察した。ウィリアムスは、ずっと長いこと、E. A. ポットと交際していた。ポットは生涯、聴覚的空間を研究していた。ポットの公式は簡単明瞭であっ

て、われわれは、あらゆる方向から同時に音を聞くから、それは中心も辺境ももたないということであった¹¹⁾。」

余りわかり易い自己説明ではないが、この概念が一時に「聞いた」ものではなく、一定の形成過程があって定着する、その過程の節目を述べているのだ、と理解すべきであろう。ウィリアムスが、眼のみえない人の「空間」感覚を追求していたことは事実であって、その関連で、マクルーハンが、ジャック・リュセランの『そして、そこに光があった』(1963年刊)を読み、大いに刺激を受けたことも確かである。その本は、著者が失明(8歳の時)してからの、新しい空間経験との出会いを詳述したものだ。こうしたことが、マクルーハンに「視覚的」空間以外の「空間」の存在を教えたこと、言い換えれば「視覚的空間」は、一種類の空間でしかないことを教えたのである。そのことは、啓蒙期の哲学者が、ある時期まで目が見えず、その後手術などで、目がみえるようになった人の「最初の視界風景」を問題にしていたことと、平行していると思われる。

「聴覚空間」は同時的で、ノエエ・リュアールで、水平的で、ダイナミックで……といった便利な「視覚空間」(以上の項目の反対項が特徴)との対照表が、ゴルドン・A・ガウの論文「マクルーハンの空間に意味をもたせる¹²⁾」にあるが、その「音」によって構成され、その特徴が「視覚空間」と全く違うものとして考えられたその世界は、固定した境界もなく、中心もなく、方向の感覚もほとんどない。ただ、「聴覚的空間」というのは、「活字文化」、それに制約された人間認識の批判には鋭どく、有効な武器ではあっても、余りに茫漠と広がり過ぎるのではないか。

第二章 『メディアを理解する』へいたる途——感覚「割合」の罫——

『メディアを理解する』に至る具体的、歴史的状況を、若干書いておかなければならない。1959-60年、マクルーハンはトロント大学でサバティカルに入る時だった。その時、アメリカの「教育放送全国協会」(NAEB)から、中等教育のカリキュラムのなかに、どういう形でメディア教育のプログラムを入れるのかという、レポートの作成を依頼された。「協会」は、40年代、50年代、主として中西部のアヴァン・ギャルド的教師を結集し、活潑な活動を展開していた団体であった。会長は、当時一種のマクルーハン・ファンでもあったスコルニア(Hary J. Skornia)、イリノイ大学のスピーチと演劇の教授である。

マクルーハンはこの仕事に全力で取り組み、「ニュー・メディアを理解するためのプロジェクトに関する報告」を作成、1960年7月の大会に提出してこの仕事は終る。

レポートは、スピーチ、書かれた文字、印刷、……新聞、写真、電信、電話、映画、ラジオ、テレビなど、メディア毎の各項目にわかれ、簡単なコメント、クラスルームで使う「質問」、チャート、文献目録がつくという構成であった。「今日の教師たちは、かれらがそのな

かで育ったのとは、全く違った環境に直面している。], で始まるこのレポートは, 「われわれの認識, 判断の様式に作用しているメディアの様態 (“mode”) について, まずはまず自覚が増大するにつれて, もはやそれらはメディアを理解する手段にとどまらず, それを予知し, コントロールする手段となる。], とうたっていた。また, 末尾には, 私がこの報告で言いたいことは, 以下のことにつきて, と自分で要約した文章をのせている。「メディアの様態を, 無意識の, 非言語的領域から, すべての仮定をとり上げて吟味し, 人間的目的のためにそれらを予知し制御するために, 研究することです。」と。マクルーハンの意図は, 明白である。それは「翻訳」を出すように, このレポートを子供用の「本」に書きなおして出す計画を, 持っていたらしい。無論, 実現はしないが, いまメディアの「理解」をしなければ, 文明, 人間にとって大変なことになるという, イニス以来の「危機感」「使命感」のあらわれと見るべきだろう。

しかし, マクルーハンが考えたクラス討論用の「質問」には, 「話すことは, 組織された, つっかえながら言うことで, 時間に基礎を置いています。話すことは, 空間に対してはどうでしょうか。], といったものが並んでいた。こうした「問い」が, 高校のクラスで討論の素材になりうるとは思えない。第一, 「質問」の意味を解説できる先生が, どのくらいいるのか。マクルーハンの友人でもあったコロンビア大学の教育学者, ルー・フォースデイルは言っている。「私はマクルーハンが序文で, これは高校の教科書だと述べているのをみて, びっくり仰天した。正気の沙汰ではない。], マクルーハンが高校生の知識レベルについて, なんの知識も持っていないことが, はっきりしたとそれは続く¹³⁾。

それはそうであろう。この「レポート」は現実のカリキュラムづくりには, ほとんど役に立たなかったであろうが, 印刷文化が感覚系をバラバラにするという話も出てくるし, 「伝令使, またはモデルをつくる人」としての「芸術家」の役割, この時期のシュラー・サイムあての手紙には, メディウムの「高い定義」(ホット), 「低い定義」(クール) の用語は出てくるし, マクルーハンの理論装置は, もうほとんどここに出揃ってくる, と言ってよいのである。この「レポート」を延長, 拡大して行けば, 『メディアを理解する』になる。

当初, マクルーハンには, エマーソンからとった, いまはサブタイトルになっている「人間の拡張」という題名にしたかったらしい。それでは, なんのことかよく判らぬ, ということで, 友人ブルックスとウォレンの『詩を理解する』にならって, このタイトルになったようである。

この本は, メディウムは, 人間の感覚器官 (あるいは腕や足のような肉体の一部) の「延長」 (“extension”), 人間の拡大だ, そして「電子メディア」を人間の「神経系統」が外に出たものだ, というテーゼが一本の赤い糸になって全体を貫いている本である。ここでマクルーハンには, 道から家, 自動車から兵器にいたるまで——新聞, ラジオ, テレビのような, ふつうのマス・メディアは勿論入っている——かれの考えるメディウムを一堂に並べた。これ

では自然の山や川を除いて、人工的な物はすべてメディウムになってしまうのではないかと思えるが、「環境」＝メディウムの集合体で、ほとんどそうなのである。

この感覚器官の外部への「延長」という思考は、どこから来るのであろうか。基線はフロイトだと思われる¹⁴⁾。フロイトの『文明とその不満』である。フロイトは西欧文明の形成を、人間諸力の拡大の文脈でとらえていた。「どの道具によっても、動力であれ不感覚的なものであれ、人間は自分の器官を完全にし、あるいはその働きを制約するものを取除こうとしてきた……」。「書くことは、その起源からいって、そこにいない人の声であり」、「家は母親の子宮の代替物となる」。

ばかりか、フロイトは、そうした道具の発展したものとして「顕微鏡」、「カメラ」、「レコード」、「電話」などをあげてゆく。その結果、「人間は……義足のような人工補完物をつけた一種の神(“prothetic god”)になっている。」。「この補完的器官を身にまとう時、人間は本当に強大になる。しかし、これらの器官は自動的に人間に生え出して来たものではなく、それらは時として大きな悩みを人間にあたえる¹⁵⁾。」

このフロイトの余りに内部の不快感が耐えられない時、それを外部に「投影する」(“projection”)という重要概念を、マクルーハンは先の『レポート』でしばしば使っており、その類縁関係は明らかであろう。両者とも器官の外部への投影を、文明の「質」と関連させて見る視点は共通していた。ただ、フロイト深部の図式が「自然／文明」、あるいは「エロス／タナトス」であるのに反して、マクルーハンの二項はあくまで「オーラル／リテイト」であった。このことでマクルーハンは、大きな修正を試みている。

この点を考えるには、「ナルコシス(“Narcosis”)としてのナルシサス」という副題がついている「ガジェット愛好家」を、見るとよい。そこには、メディアと人間の関係における、マクルーハンの解釈する「ナルシサス神話」の意味が、解明されているからである。「ナルシサス」は、ギリシア語の無感動、硬直を意味する「ナルコシス」から来ている、かつてこのギリシア神話は、人の知る通り、水にうつった自分のイメージを、他人と間違えた(傍点一筆者)ナルシサスがそれに恋して、そのまま硬直、変形してしまうという話である。¹⁶⁾

すでに以上にもマクルーハンの解釈は入っているわけだが、かれの絵解によれば、「青年ナルシサスは水面に映った自分の姿を、他人と見間違える。この鏡という手段によって成立した自分自身の拡張が、彼の感覚を麻痺させる。彼は拡張された自分、あるいは反復されたイメージの自動制御機構(“servomechanism”)と化した。」(後藤・高儀訳、56頁)。

続けてマクルーハンは、ハンス・セリエなど医学者の自己「拡張」を「自己切断」フロイト的(“amputation”)とみなす「ストレス」学説を紹介して自説を補強したのち、この神話を、メディアの地平へ導き入れて行くのである。「どんな発明や技術でも、すべてわれわれの身体の拡張、ないしは自己切断であり、この拡張は、他の身体諸器官、および身体の拡張したものに新しい感覚の比率関係や新しい均衡を求める。」(同上書、60項)。つまり、マク

ルーハンによれば、この神話をナルシサスが、「自分自身」に恋したように解釈するのは、われわれを長く縛りつけて来た活字文化のせい、だと言うのである。

ギリシアの神話作者と同じことを言っている例として、旧約聖書の詩篇（かれは 113 としているが、共同訳では 115）を、マクルーハンがひく。

「国々の偶像は金銀にすぎず／人間の手が造ったもの／口があっても話せず／目があっても見えない／耳があっても聞えず……」

無論、「偶像崇拜」禁止の有名な箇所、「偶像を造り、それに依り頼む者は／皆、偶像と同じようになる。」で結ばれるわけだが、マクルーハンは、この「偶像」と「メデイウム」を等置し、「偶像」を見ること、あるいはテクノロジーを使うことが、人びとをそれに同化するのだ、とみるのである。このあたりは、人間が外化した「商品」によって逆に支配されるという「疎外論」に結果としては多少似ているかも知れない¹⁷⁾。批判の武器としての効用もふくめてである。

が、マクルーハンの意図は他にあった。かれはこの「ナルシサス神話」を、フロイトが核にしているエディプス・コンプレックス、「オイディプス神話」——マクルーハンによれば、この用法も、活字文化の「直線型」思考の産物である——に置き換え、フロイトを超えようとした試みになるのである。フロイトを超えたかどうかはともかく、フロイトの「オイディプス神話」が、活字文化の申し子だという意見は、すでに 1959 年の論文「神話とマス・メディア」にみられ、今に始ったことではないが、マクルーハンにとって、エレクトロニック・メディア時代の神話原型は、「ナルシサス神話」でなければならなかったのである。

『メディアを理解する』は、最初の 7 章がメディアの「文法」を理解する総論になっており、残りの 26 章がある意味ではアルファベット順に並んだ各「メデイウム」論という構成になっている。

マクルーハンは、1960 年テレビで行なわれたケネディー・ニクソンの討論、大討論と称され、以降大統領選挙を左右する行事となる、に関心をもっていた。マクルーハンのみるところだと、ケネディーのイメージは「若い、内気なシェリフ」というところで、ニクソンのイメージは、「その小さな町の住民の最上の利益にはならないような借地契約書にサインさせる、鉄道会社の弁護士」といったところになる。若い「シェリフ」の方が、必ずしも悪徳ではないにしても、海千山千の「弁護士」よりも大衆的人気を集め易いわけだが、マクルーハンは続けて、ケネディーはニクソンより、より明確に規定されないイメージを投射している、ケネディーのほうが、かすかにぼやけているノンシャラントな「クール」なパーソナリティで、「クール」なメディア、テレビに向いている、としたのである。マクルーハンの有名な「ホット」と「クール」のメディア分類である。ただこれも、アメリカの政治はすっかり娯楽産業の一部と化して「芸能化」している、という冷たい、冷め過ぎるような視点から言われているのであって、マクルーハンは決して「大衆民主主義」の徒ではない。

メッセージ内容の「高い定義」(「ホット」)、「低い定義」(「クール」)が進化してゆくわけであるが、マクルーハンは、これを受け手の「参加」の度合いを計る尺度として使う。活字で構成されたものであれ、イメージで構成されたものであれ、その内容がぼやけ、曖昧であればあるほど、受け手は自分の解釈を入れ、想像力を動員し……そのなかに入ってメッセージを「完成」させようとするという前提である。そうでない場合もありうるよ、ということが言いたいわけではなく、この「参加」(“participation”)のコミュニケーション・モデル、「対話」の型に近接していることは、注意すべきであろう。ただ、この「ホット」と「クール」のメディア二大分類、厳密に言えばメディアの送り内容ごとに違って来るもので、必ずしもメディアの分類とはなりえないのかも知れない。

この『メディアを理解する』あたりから、アカデミーでの不評・無視と大衆的ジャーナリズムの世界での人気上昇現象とが、平行して進行する事態になる。その理由はいろいろあって単純ではないが、一つだけマクルーハンにとって致命的だったものをあげるとすれば、電子メディア、テレビジョンの過大評価であろう。

「視覚を感覚の中の玉座に据え、感覚をきびしく分離し、専門化する、長い間の西欧人の生き方は、抽象的な『個人』という偉大な視覚的構造を洗い去るラジオとテレビの波には対抗することができない。」(後藤・高儀訳, 409頁)といった美文は、同書の「31, テレビ——臆病な巨人」から、いくらでも引くことが出来る。テレビジョンは、失なわれた人間の「感覚系バランス」を回復することが出来る。もし、「聴覚的空間」の育成に適したメディウムがあるとすれば、それはテレビである。

なによりも、「テレビの映像」は、見ているものを「没頭し、さぐりを入れ、身をかがめて深く自分を関与させる。」(同上書, 399頁)。テレビジョンは、深部において受け手に「参加」を要求するメディアなのである。現代メディアの「暗い絵」を、現存のどのメディアかによって逆転する、マクルーハンは解決を急ぎ過ぎたかも知れないが、マクルーハンが言っているのが、「現実の」テレビではないことに、先ず注目すべきであろう。それは、理念型ではなく、なんとはいえよいか、マクルーハンの想念の「あるべき」テレビ像なのである。現実のテレビではない。でなければ、どうして「『統一された感覚と想像力』をそなえた生活は、長い間ヨーロッパの詩人、画家、芸術家たちにとって見果てぬ夢であった。彼らは十八世紀以降、西欧の文字文化人の断片化し、貧しい想像力しかない生活を見て、悲しみと嫌悪とを覚えた。……彼ら(ブレイク、ペーター、イエイツ、D. H. ローレンスらの名前があげてある。-筆者)はラジオやテレビが人間の美的感覚にうったえて、日々の生活の中に、自分たちの夢が実現されるようになるとは思ってもいなかった。」(同上書, 408-9頁)。といった文章が書けるのか。こんな、「生活」を「芸術化」といったユートピアが、現実の電子メディアで現実化すると、マクルーハンが本気で思っているとは到底思えない。

全体をよく読めば、「聴覚」「視覚」の対抗を活性化させること、「オーラル」メディアと

「リテライト」メディアの「相互作用」(“interplay”, “interface”)に、マクルーハンの脱出路は、布置されていることが判る。しかし、この「想念」のテレビ賛美は、しばしば「現実」のテレビ賛歌と誤解され、またマクルーハン自身にも、そうした混同を、意図的に助長したところがなくはなかった。

マクルーハンは、公的にこうした発言を撤回したことはなかったが、70年代のいくつかの私的手紙では、いくつか現実の電子メディアについて触れている。テレビが、人間にとって必要な「生活の私的領域」を浸食しているとか、電子メディアは、個人のアイデンティティを退化したレベルにまで押し下げ、道徳的感情をゼロに近い地点にまで引き下げるとか……別にマクルーハンに聞かなくとも、われわれみんな、普通のマス・メディア批判で山と聞いている文句が、マス・コミ批判の「クリーチェ」といってもよいが、そこには並んでいっただけであった。

マクルーハンの頂点における、このいささか喜劇的転回の理論的理由は、やはり年来の主張でもあり、『メディアを理解する』でも存分に使っている「感覚系のバランス」理論に求めなければならない。このトマス・アクィナスに始まる理論、マクルーハン自身の言葉で語らせた方がいいだろう。『『共通感覚¹⁸⁾』(“Sensus Communis”)は、なん世紀もの間、一つの感覚の種類の経験をすべての感覚に翻訳し、心に統一したイメージを提供する、特有な人間能力と考えられて来た。事実、感覚のあいだの統一した割合(“ratio”)は、長いこと合理性(“ratio nality”)の標識と考えられて来た。つまり、マクルーハンにとって、「合理的」であるとは、正しい「感覚の割合」を保っていることと同義なのである。しかもマクルーハンは、このバランス、「割合」が人間に自動的にあたえられたものではなく、文化的、歴史的経験によって変るものだとみ、一つの文化には「支配的割合」があるとして、かれの「メディアウム」理論に接合したのである¹⁹⁾。

トミストが「触覚」を「共通感覚」の構成に中心的役割を果すものとして、重視した。マクルーハンもそうであり、「触覚」(“tactile”)というのは、かれにも特別な意味をもっていた。イニスに最初に興味をもったのは、イニスが、石や粘土やパピルスに「触る」感覚の記述をしていたからではないかとさえ思われる。私にはどうもよく判らぬが、マクルーハンにとっては、テレビも一種「触覚的」要素のある、メディアなのであった。

マクルーハンは、この感覚系のバランスを「センスの類型学」(“sensory typology”)と称し、トロント大学内にセンターをつくった時から、その「実証」が、一つの大きなプロジェクトであった²⁰⁾。マクルーハンの壮大な意図は、ロールシャハ・テストのように個人に適用出来、「バランス」状態が判るテストを考案することであった。これが出来て、始めてマクルーハンの言うメディアウムの「効果」を、全面的に解明することが可能となる。そうすれば、教育者にも、マス・コミ界の人間にも、嫌いな政治家にも、いまだかつて知られたことのない、人間の「生」を変える方法を提供できる、とマクルーハンは信じた模様である。センターで

は、ここの系統の精神病理学者ダン・カボンがこの「実証」を担当し、いくつかの実験をやっていたが、思わしい結果は出なかった。

いったい、膨れ上がったマクルーハンの期待に答えることが出来るのか。相応の理解者であったトム・ウォルフが、最近の神経生理学でも、内部に「感覚のバランス」があるとか、それがメディアの使用で変るといった「証明」は出来ない、と言っている通りであろう。それはマクルーハンの意図に反して、錬金術の「賢者の石」と化し、一種の「救済」願望へ接続しているのではないか。

最後にアカデミーからの「疎外」と理論的に直接の関係はないが、かれが学会と疎遠になる主要原因に、マクルーハンが広告業界の寵児になり、ベル電話会社、ジェネラル・エレクトリック、ジェネラル・モーターズ、IBM……などアメリカ有数の巨大企業とワーク・ショップをもったことをあげる「左翼的」意見に触れておこう。それもある程度はあるであろう。いくら産学共同のアメリカでも、余りアカデミシヤンのことではなく、このことがトロント大学当局との関係を、相応に悪くしたことは事実である。しかし、マクルーハンが大資本に協力していたかという、ワーク・ショップなどでの発言を見るかぎり、成行はそれほど単純ではない。

マクルーハンがジェネラル・モーターズでは、この新しい共同体が出来つつある時代には、結局個人を相手にする「自動車」は、古くさいものになっているといった趣旨のことも話している。ベル電話会社では、電話がどう「感覚系」に効力をあたえるかを、長ながと論じていた。いずれも、例によって誇張されていると思うが、おなじみのマクルーハン自説の展開である。この新しい「コミュニタリアン感覚」が育って来ているので、十九世紀的「専門化」の上に立つ企業・会社はもう駄目だという視点は、ほとんど最後の著作といってもよい、1972年刊の『現在をとらえよ！ ドロップ・アウトとしてのエグゼクティブ』（バリントン・ネヴィットと共著）に至るまで、一貫している²¹⁾。

しかし、こんな言説が、なにか会社経営に役に立ったのであろうか。経営者諸公はマクルーハンの話を聞いていないか、でなければ、「話」をしたと言うことが重要で、かれがなにを喋ろうと構わなかったのだ、と思わざるえない。マクルーハン＝メディアだとすれば、「メディアはメッセージである」。マクルーハンは正しい。

第三章 60年代の知的情況のなかでの位置

——スノーとゾンタークを引照枠にして——

50年代末から60年代におけるアメリカの政治・社会的状況は、ここでは捨象してあるが、ヴェトナム戦争がどういった直接的なことではなく、ここでは知的世界における二つの問題群をあげておくことにしよう。マクルーハンの言説が置かれていた環境が、より鮮明にな

るからである。一つは、マクルーハンの教養がそこから出発している、30年代イギリスにおける「文芸批評」の特異な位置を、改めて見ておかなければならない。

そのことを再現したのは、C. P. スノー「二つの文化」がひき起こした激しい論争である。スノーは1956年、「ニュー・ステーツマン」誌（10月6日号）に、「二つの文化」と題する論文を発表した。かれは1959年、ケンブリッジ大学に招かれ、この論文の趣旨を拡大した講演を行い（“Rede Lecture”）を行い、大きな論争の的となった²²⁾。

スノーの言いたいことは、「文学的人間」（文人）と、主として自然「科学者」とが、二つの異った部族のように違う価値感を持ち、お互に相手の知識内容を知らず、コミュニケーションもなしに敵対し合っている、これが西欧世界の根底に横たわる大問題だとしたのである。この「二つの文化」の断絶は、ヨーロッパ、アメリカよりも、イギリスで特に目立つとスノーが見ていることに注意すべきであろう。「科学者」としての実績もあり、多くの「小説」（その出来映はともかく）も書いているスノーは、めずらしい横断的人間であり、こうした問題提起をするのにふさわしい人間ではあった。ここで「二つの文化」がまきおこした論議の、全過程を扱おうというわけではない。そのほんの一部である。

恐らくこのスノーの意見に最も激烈に、ということは感情的にと言うことでもあるが、反論したのは、F. R. リーヴィスであった²³⁾。スノーの「文学的人間」の批判は、かれらがその内で生活している技術体系、「科学」の成果、内容について全く無智であるということもあったが、それよりもかれら、イエイツにしても、パウンドにしても、ウィンダム・ルイスにしても、政治思想の次元ではみんなおかしい、少なくともアンチ・デモクラチックな連中ばかりではないか、ということに力点がおかれていた。リーヴィスとのやりとりのなかでスノーは、19世紀のラスキンにしろ、モリスにしろ、あるいはアメリカのソロー、エマーソンにしろ、一種の“ラッダイト²⁴⁾”と同じで、産業革命の本質はなにも判らず、したがって自分をとりまいている「社会的現実」が、なにも判っていないのではないかと、とまで言ったのである。かれらの「機械文明」「産業社会」批判は有効ではない、というのがスノーの見取図であった。

みんな、リーヴィスの守護聖人であるわけで、かれの怒るのも当然ではあった。リーヴィスは、1962年のリッチモンド講演で全面的に反撃する。かれの語気のすさまじさには、へきえきする以外にないが、ここでその反対の論理の全体を辿る必要はない。ただリーヴィスの眼には、スノーこそが「墮落した現代文化」の象徴、俗悪な「H. G. ウェルズの精神的息子」と映じていることに、注目すべきであろう。

リーヴィスの結びの文句は、こうであった。将来のケンブリッジ（大学）は、日曜新聞の宣伝するような文化を、「この世界においてこれまで知られ、考えられて来た最上のもの」の模範としてはならない、と。引用符をつけた語句は、マシュー・アーノルドの『文化と無秩序』からの引用であった。つまりリーヴィスは、アーノルド以来の「文芸批評」の伝統を、

少しも変えていないのである。

マシュー・アーノルドの時代に、ハックスレーとの間に、すでに「二つの文化」をめぐる意見の対立はあった。「ダーウィンのブルドック」と称された T.H. ハックスレーは、1880 年 10 月 1 日、バーミンガム、新しく設立されたサイエンス・カレッジで、“科学と文化”と題する講演を行った。このなかでハックスレーは、現代世界を基本的に形づくっているのは「科学」であり、その科学的知識の理解なしには、この「世界」も、そこで生活する「人間」も、判らない。その知識が、精神を「蒸気機関のようにし、どの仕事にも向くように」、人を教育するのだと説いたのである²⁵⁾。勿論、ハックスレーが、ギリシア、ラテン語の修得を「教養」の基本とする。古いカリキュラムを批判していたことは言うまでもない。

マシュー・アーノルドは、1882 年 6 月 14 日ケンブリッジ大学で行った“文学と科学”(“Rede Lecture”)という講演で、ハックスレーに反論した。ハックスレーの「科学」の定義は余りに狭すぎる。と同時に、「科学的知識」は、あくまで特殊な知識にとどまり、普遍的な「人間」と「世界」の理解には至らない。それが出来るのは広い意味の文学、「文芸批評」でしかない、と言うのであった²⁶⁾。アーノルドの構想している「文芸批評」(“Literary Criticism”)が、拡張して「社会批評」となり、「生き方の批評」、人生必須のガイドとして位置づけられて行く。このアーノルドの道統を 20 世紀の環境のなかで、一種の極点にまで徹底させたのが、リーヴィスの立場であった。

リーヴィスは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの学生連盟の前で、“文学と社会”という講演を行った。そこにはリーヴィスの構図が明瞭に弾き出ているので、それを要約してみよう。かれは、ロマンチズムの遺産が大衆的にはまだ根強く残っていることに触れ、「突如、才能のある個人があらわれ、インスピレーションが入りこみ、創造が結果する。」、というお伽話図式だと皮肉たっぷりに述べる。そんなお話にかかずらうことなく、「批評」にとって大事なことは、文学生産の「文学・外」(“extra-literary”)条件を探求することだ。かれが「文学・外」的条件といているのは、マルクス主義のように経済的、物的文脈を再構成することではなく、対象にしている作家が意識、無意識に所属している「精神的伝統」を明らかにすることだ、と規定したのである。それは、リーヴィスのやって来た仕事の意味を説明すると同時に、かれにとって「文芸批評」が、すべてがそこから伸びてゆく根源に据えられていることを、よく示していた。

かれの「社会学」「社会学的」なものに対する態度には、微妙なものがある。「社会学」のために「文学」を犠牲にしているとして、H. G. ウェルズの「社会学的」小説は、大嫌いであったが、必ずしも社会学的調査一般を否定していたわけではない。メイヒューの調査(『ロンドンの労働者とロンドンの貧民』, 1851, 1862 年刊)などは、ディケンズの文学的透視を裏づけるものとして、高く評価しているし、ジョン・ドス・パソスの「社会学的」描写も、それなりに認めていないことはなかった。リーヴィスの構図が、いわゆる「文学研究者」だ

けで狭く固ったサークルを考えていたのではないことは、「スクルーティニー」誌の構成からも、うかがうことが出来る。同誌の寄稿者には、多くの社会学者、経済学者、心理学者、人類学者がおり、それなりにマルチ・ディシプリナ雑誌であったことを、確認しておくのもよいであろう。ただ、あくまで基底には「文芸批評」がなければならず、「社会学」「物理学」のたぐいが根底では、いけないのである。そのことは、それなりの名著、1931年に出たレヴィン・シュッキングの『文学的趣味形成の社会学』に対する「スクルーティニー」誌上の酷評からも、うかがうことが出来る²⁷⁾。

このスノー・リーヴィスの対立構図のなかに、マクルーハンを置いてみると、どうであろうか、マクルーハンは、もとよりかつての入れあげていた先生、リーヴィスの系統に立っているわけだが、空間論から独自の「メディウム」論に移行しているだけ、少しスノーの側にも近寄っている、やや中間的立場といってもよいであろう。

マクルーハンがこの時点で、リーヴィスの「有機的コミュニティ」、「南部の農業主義者」とよばれる、新批評のユートピア願望と、いく分距離をおいているのは、前に見た通りである。「内容」(“contents”)の否認は相変らずだが、これはメディア「内容」を復活させ、「内容」批評を行うコースを辿れば、イギリスの「カルチュラル・スタディーズ」に行き着く。イギリスの新左翼が妙にマクルーハンに好意的なのは、途中まで道が同じだからである。

ただ、H. G. ウェルズ、というよりリーヴィス——ウェルズ対抗軸と言った方がより正確か、については、もう少し言って置かなければならない。そのほうが、20世紀初めからの、より大きい、山脈のなかへ、マクルーハンをすえることが出来るからである。「文芸批評」と「社会学」との関係、といってもよい。

1903年11月、ロンドンで「社会学協会」(“Sociological Society”)が結成されるが、ウェルズは創立メンバーの一人であった。1906年2月26日、ウェルズは、フェビアン協会主流、とくにウェッブ夫妻と対立する時期(後、退会)、社会学協会の主催でロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで行なわれた会合で、「いわゆる社会学の科学とよばれるものについて」という題で講演している。それはウェルズが、当時の社会学的文献について、相当広汎な知識を持っていることを、端的に示す講演であった²⁸⁾。

ウェルズは、ディケンズの『困難な時代』に出てくる、亭主がわけの判らない「…的研究」(“-ological studies”)に熱中しているとぼやく、グラッドグラインド夫人の嘆きに同調する。いまの「社会学的研究」も、それと同じだと言うのである。ウェルズの主張は「社会学」を自然科学と同じ、とくに数学モデルになぞらえて、その方法を考えるのはおかしい。コントもスペンサーも、間違っているとみるのである。

ウェルズの論理に細かくつき合う必要はないが、具体的人間、その諸関係が織りなす歴史は、「モノ」と同じように、分類したり、計量したりすることが出来ない。ここから、「自然科学」とは異質の「社会科学」独自のコースを探っていくのがデイルタイ、リッケルトら、

ドイツ、新カント派の辿る道であるが、ウェルズはもっと素直に「科学と芸術の再結合」、
「社会学」の「文学化」へ帰帰して行くのである。そこから、バルザックの「人間喜劇」で
はないが、社会のいろいろな人間、その諸関係を描くリアリズム小説、「社会学的小説」が
高く評価されるようになる。

ウェルズは、この「社会学」と「文学」の結びつきを、更に一步進めて独自の見解を展開
した。

「コンスタンティノーブルの下層民をどうするかとか、ロンドンの公園で眠っている浮浪
者をどうするかとか、失業者にスープやコーヒーを提供する運搬車をどう組織するかとか、
酒場で酔い潰れる以外のことはなにもしない、無智な人びとをどう立ちなおらせるかとか
……」、そういったことは大事な、重大な問題であるが、行政官吏、政治家が現実的に解決
すればいい問題であって、「社会学」が取扱わなくともよい、とウェルズは言うのである。
「社会学」はもっと全体的な、あるべき未来社会の構想を描き出すべきではないのか。プラ
トン、モア、ベーコンらの系譜につながる「ユートピア文学」のジャンルこそ、本当のある
べき「社会学」だ、と主張したのである。ウェルズが、究極決裂することになるヘンリー・
ジェームスあての手紙で、自分にとって「文学」は他のなにかの目的へのメEDIUMであっ
て、絵画のようにそれ自体「完結」したものではないことを強調していたのに、留意すべき
であろう。

その後、協会の機関誌『社会学評論』誌上で、かなり活潑な討論が行なわれる。さすがに
「ウェルズの「ユートピア文学」=「社会学」という図式への賛成者はほとんどいないが、
ある種の小説は「描写的社会学」(“descriptive sociology”) だとして、有用性、親縁性を評
価されることになる。かれらの意図に反して、現在のわれわれの眼から見れば、「社会学」
が茫漠たる「文学」の大海へ埋没して行くように見えるのである。デュルケームの「社会
学」が、大学教養の「文学的伝統」を崩すものとして激しく攻撃され、闘争のなかから自立
していくのと、逆の位相がイギリスでは起っている。その一つの証拠に、イギリスの大学の
大半に社会学コースが組みこまれるのは、第2次大戦後のことになる。とくにケンブリッジ
はおそい。なにかが、その役割を代行していたのである。

マクルーハンの「理論」は、この大きな文脈に置いてみる時、なお一層その位置関係は、
明らかになるであろう。

もう一つは、若者の変化についての問題である。スーザン・ゾントークを引照枠にすると、
よいであろう。

1966年の夏、マクルーハンが嫌いで、かつて対抗誌を出そうと試みたこともある「パー
チザン・レビュー」誌が、多くの知識人に質問状を送って、回答を求めた。アメリカのこれ
からの生活の方向については、大きな不安があり、「実際、アメリカが道德的、政治的危機
("crisis") に入りつつあるのではないか、という恐れには、根拠があります。」というのが全

体のトーンで、その方向にそった具体的な質問が並ぶ、という恰好だった。

その7番目の質問が、「あなたは、今の若い人びとの活動に、なにか希望が見つかると思いますか」、というものである。この前年、1965年にレスリー・フィードラーは、「新しいミュータントたち」という、評判になった若い世代論を書いていた。「ミュータント」とは、後に日本で中野収が命名した「エイリアン」と相似た現象だ、といえれば判り易いが。フィードラーの論文は、それだけではないが、若い世代の服装、ヘアスタイル……性の区別をなくす方向へ向っており、「新しいアンドロギュノス種属の誕生」であり、「西欧男性のラディカルなメタモルフォーゼ」が、始まっているというものだった。

ゾンタークは、このフィードラーの「ミュータント」論を軸に、それへの反論という形で、この「パーチザン・レビュー」誌の質問に答えていた。²⁹⁾ゾンタークは、この時点で、「若い人びとの活動」——政治行動、ダンス、ドレス、ヘア、暴動、恋愛の仕方まで、全面的に肯定した。「いま、この国で」希望のもてる「唯一のもの」、とまで言ったのである。単線的な賛成、反対論ではないが、当然フィードラーの「ミュータント」論に、批判を加えることになる。

フィードラーは、こうした風俗、「生活様式」が、ラディカルな政治活動、社会のモラル・ヴィジョンにマイナスに働くのではないかと心配していた。もっとはっきり言えば、フィードラーは、かれらが本質的には「非・政治的」であり、「革命的精神」とみえるものは、単なる甘やかされた「幼児性」なのではないかと疑っているのだ、とゾンタークは見るのである。フィードラーのこうした疑念はかれが在来の「マルクス主義的」（あるいはアナキスト的）運動家の理念、人間的には労働、勤勉、家庭といった「伝統的ピューリタン」価値にどっぷりつかっているから出てくるのだ、とゾンタークは激しく批判した。マルクス、フロイト（いくつかの系統にわかれるが）も、究極そうした価値意識をひきずっている。若い世代のラディカリズムは「ポスト・マルクス」、「ポスト・フロイト」なのだと言ったとゾンタークは強調した。

かの女の論理は、そうくわしく辿る必要はないであろう。要するに、「私（ゾンターク）の経験と観察」によって一論理的に証明出来ることでは本来ない——ゾンタークは、「性的革命」と「政治革命」とは連関・対応することを確信していたのである。その観点からゾンタークは、留保つきではあるが、「ドラッグ」の使用を容認し、フィードラーが「女性的」「受動的」と批判した、一部若い世代の東洋思想（もっと広くはノン・ホワイト思想）への傾斜も容認した。「もし、アメリカ」が、「西欧ホワイト文明」の終末を意味しているとすれば、探求の眼をほかの文明、思想に求めてなにが悪いのかというのである。たしかに、スーザン・ゾンタークの「回答」は、この「危機」に対処する一方の極の診断書を示していた。

マクルーハンには「パーチザン・レビュー」誌のアンケートが行くわけもなかったが、文脈はかなり違っても、かれが相当に深い「危機」意識を持っていたことは、まず確認してお

かなければなるまい。マクルーハンもまた、診断書（治療の処方箋と言った方がよいか）を呈出していた。内容は言わなくても、判るだろう。いまが「メディアの交替期」、古い世代と若い世代と育ったメディアが違うからだ、というのである。1967年の本（クエンティン・フィオーレと共著）『メディアはマッサージである』は、ある意味ではそのために書かれた本といってもよい。一、二引用すると、「総合的な電気的情報によって作り出された家庭の環境と、教室との間には、大きなちがいがあある。今日のテレビ子は、“おとな”が受けとる最新のニュース——インフレーション、暴動、戦争、税金、犯罪、水着の美女など——に波長を合わせている。そして、いまだに19世紀の環境そのままの教室にはいると、途方に暮れてしまう。……今日の子どもは不合理な存在に育っていく。というのも、子どもは二つの世界に住んでおり、その世界のどちらもが子どもを育てようとはしていないからである。」（南博訳、18頁、1995年、河出書房新社）。

おわりには、息子がおやじに説教しているマンガがあり、その内容はこうである。「わかるかい、おとうさん。マクルーハン教授は、人間の作った環境が、逆にその中で彼の役割を決めてしまうといっているんだよ。活字の発明は線的な、連続的な考え方を生み出し、思考と行動を分離させたんだ。……」（同上書、画はアラン・ダン）

とうとうとマクルーハン「理論」の解説を、するのである。かれの「理論」は、こうした問題のためにも存在したのだ。

現在、マイケル・ジャクソンのような、アンドロギュノスめいたタレントは、いくらでも定着しているが、もう御当人も死んでしまったが、ゾンタークが期待した新しい「革命家」は、地平のどこにいるのか。マクルーハン「解法」の変奏曲は、まだいくらも続いている。

第四章 「文芸批評」でのノースロップ・フライとの交渉 ——「クリーチェ」と「アーケタイプ」の転換様式——

マクルーハンがアカデミーと生産的論争をするもう一つの、ある意味では最後の機会が70年代初期に訪れる。それはマス・コミ研究の「主流」とではなかったが、マクルーハンの起点である「文芸批評」の分野にもどつての、カナダの星、ノースロップ・フライとの対決である。

フライは『批評への道』（1971年刊）でも、マクルーハンの批判をしているが、もっと全面的な批判を、BBCの雑誌「リスナー」に書いていた³⁰⁾。口頭コミュニケーションの口頭社会に対する批判である。「文字」以前の社会がそんなにいいものなのか。マス・メディア、とくにテレビジョンが新しい次元でその様相を復活するとすれば、「タンザニアやパラグアイが直面しているすべての問題を……もわれわれの居間にひき入れる」ことになる。

タンザニアやパラグアイはともかく、「もし世界がグローバルな村になりつつあるとすれ

ば、それは現実の村の特徴を再現することになる。……徒党を組むこと、生涯にわたる敵対関係、超えがたい社会的障壁とか……。濃密な共同体の織り上げる息苦しい諸関係、テンニースのいうゲメインシャフトは、よいところばかりではない。フライは、そうした側面を少しどぎつく表現して、マクルーハンを批判してゆく。

それに、マクルーハンのいう活字メディアの「直線性」と、電波メディアの「同時性」というのは、メディアの二類型ではなく、すべてのメディアに共通する読み方の二様式でしかないという批判が続き、詩人のあり方にまで及ぶのである。リテライト以前の社会では、聞いている聴衆の前に立つ「詩人」は、「その時かぎりの、あるいはそうでなくとも短命なテーマを使わざるをえない。詩人は社会からしりぞいて、後世のために書く、ということが出来ないのである。」

余りそんなことを言えば、現代社会でもいわゆる高座芸人はみんなそうであって、作者の「意図」と作品の「内容」とは一応別に考えるべきであろうが、世界的に高名な文芸理論家に、そんなことを言う必要はあるまい。伝統的、常識的なだけに、フライの批判はそれなりに説得力をもった、と思われる³¹⁾。もうそろそろジャーナリズムからは、「死んだ犬」扱いにされる時期であった。

マクルーハンのほうはどうであったか、フライの「元型」理論は、静的で単なる「分類学」に過ぎない、というのがマクルーハンの年来の主張であった。また、フライの『批評の解剖』は、ダンテ、シェークスピア、ミルトン……などのキャノンの「高級文化」しか対象にしていない。現在では「ジャンルのからみ合った複雑な世界」が出現していることを強調していたマクルーハンにとって、それも不満の種だったらしい。

1970年にマクルーハンは、ウィルフレッド、ワットスンと共著で『言い古された表現から元型へ』(“From Cliché to Archetype”)を出した³²⁾。これが、そればかりではないが、フライに対する全面的批判といってもよい。この本の基本的なアイデアは、すでに1964年のマクルーハンの論文、「ニューメディアと芸術」に見ることが出来る。「メディウム」は「環境的」であり、「その環境が発展的に再構成されていく時、使い古され、おとしめられた表現(“cliché”)が、制度化した芸術的ジャンル(“archteype”)になる」。こうした連続・転形を考えていけば、フライの「元型」概念はダイナミックになり、動いて行くとマクルーハンは言ったのである。この流動の過程には無論、マクルーハン独自の「意識」論が結びついていて、技術体系は、われわれの「環境」を構成しているから、目にみえず、意識もされない。「クリーンチェ」も同様であるが、メディウムの構成が変わって、それが意識されるようになると「アーケタイプ」になる、というのである。この骨格に肉づけをして、全面展開をしたものが、このワットスンとの共著であった。

マクルーハンにとって『メディアを理解する』以来の、本格的な「本」であり、かれは大きな期待をよせていた。第一、「本」がよく売れると思っていたらしく、フランク・カマー

ドあての手紙では、「一種のブロックバスター」になるだろうと逸言している。実はほとんど売れない。この、モノログが二つ並んでいるような「本」、マクルーハンの著作のうちでも特に難解であり、どうしてこれが大衆的に読まれると思うのか、そのほうが不思議であるが、ともかくその論理の糸を辿ってみよう。

マクルーハンは、「クリーチュ」いう概念を。思い切り最大限に拡張して使う。それは言語表現の次元にとどまるものではない。そこでもう、普通の用法からは、はずれてしまう。マクルーハンは、社会的・歴史的な世界を。実践としての「クリーチュ」によって組織されたものとみる。それは、現実を「構造化」してゆく、日常行動様式であると同時に、「意識」の型なのである。この「クリーチュ」の群れは、環境をつくって行くと同時に、じょじょにそれを崩して行く。したがって「クリーチュ」が、「環境」「メディウム」と同一の概念に拡張してゆくのである。

しかし、「クリーチュ」は、テキストの背後にある観念、仕事の背後にある道具、商品の背後にある市場のように、「透明」で目にみえない。それは「使い古されて、表が消えてしまったコイン」のようなもので、ある種の「社会的通貨」として流通すればよいのだとマクルーハンは言う。こうした「クリーチュ」群が、芸術家によって「元型化」されるのだとして、イオネスコの例を出す。

イオネスコは、「言語をコミュニケーション、あるいは自己表現の道具とみることを拒否し、それを交換可能な個人による。秘められたなにかエキゾチックな実体——一種のトランス状態——とみているのである。」

本当にイオネスコがそう考えていたかどうかは別にして、「言語」についての伝統的観念が「クリーチュ」で、イオネスコはそれを「アーケタイプ」に転化したというのか、この移行過程の説明は、判りにくい。芸術家とはなにか、マクルーハンはアーティストをどうみているのか。

「多分、すべての著者は、かれらの受け手のために、ある程度“神を演じ”なければならない。『神の猿ども』で、パーシイ・ウィンダム・ルイスは、神のような探索者としての著者の本質そのものを問題にした。ルイスは著者たちを、本質的には他の人びとのアーケタイプの物まね猿、あるいは操作者として描き出した。」

サルトルも同じようなことを言っていたが（『文学とはなにか』）、小説の場合、作家は、人物を。全く新しい世界を、意識のなかに作り出すことが出来る。たしかに、かれらはマクルーハンのメディア宇宙でアンビバレントな機能をもったヒーロー、ヒロインである。しかし、ルイスのように「猿」とまでは言わなくとも「神のような」「神を演ずる」ということに注意しよう。神は「無」（“ex nihilo”）から創造されるが、アーティストはそうではない。かれらは、かれらを取りまいている環境をリサイクルするだけ、マクルーハンの辞書でいえば、「回復」（“retrieval”）という用語になる。アーティストの対象にする環境は、テ

テクノロジーであれ、イデオロギーであれ、意識されない、膨大な支配的な「クリーチュ」の充滿した「荒地」、ゴミの山だというのである。それを意識の次元にのぼし、整序して表現する（「アーケタイプ」を回復する）のが、芸術家の役割だというのが、マクルーハン、動く論理の枠組みであった。「古いクリーチュは新しいアーケタイプとなり、古いアーケタイプが新しいクリーチュとなる」という一種の循環図式が定式化される。

こうした事例でかれが脳裏に描いているのは、主として小説家（詩人）のようであるが、マクルーハンにとって、アーティストの定義が普通より広くなるのは、当然の成行であった。すでに『メディアを理解する』で、「科学的、人文的な各分野において、かれの行動と、かれの時代の新しい知識の意味をつかんでいる人びと」という、茫漠と広がる、ほとんど「意識している人」というに等しい定義がみられる。

連動して「芸術」の定義も拡大せざるをえない。「われわれの延長した諸能力からくる次の打撃を予想して、どうわれわれの心（“Psyche”）を再調整すればよいかについての正確な知識」、ということになる。ここまで広げると、メディウムの効果を「意識した」、すべての人がアーティストということになるが、「正確な知識」といっているから、恐らくその数は、余り多くはないであろう。どう「心を再調整するか」から、創作論が始まるのであろうが、マクルーハンはそれ以上には踏みこまない。またそれには、立ち入る必要もないであろう。

それにしても、マクルーハンはいささか奇妙な事例の引きかたをする。かれの恩師リチャーズは、この時期、アメリカのウィンスコンシン大学で教えていた。が、ある日メンドタ湖でカヌーにのって、湖に落ち溺れそうになる。先生は無事救出されたわけだが、『カーディナル』という学生新聞が、その模様をマンガに描き、そのキャプションに「ありきたりの反応（“stock response”）によって救助される」と書いた。気のきいた皮肉であるが、マクルーハンはこのことを引用して、次のように言う。

「われわれの大半は、生活のすべての非・言語的状況において、ありきたりの反応によって救われる。クリーチュ——アーケタイプのテーマについても、非・言語的形態で考える必要がある。」

そのことは判らないではない。が、反面なぜ「クリーチュ」といった概念を、どこまでも次元を横断してひき伸ばし、言葉も日常行動も一緒にして、ほとんど定型化した「習慣的」なもの、すべてを包みこもうとするのか。そんなことをして、なにが現実分析上の利点はあるのか。混沌とした現実のすべてを、二、三の概念に押し込めるのは、悪しき還元主義ではないのか。

的になった、フライの反応に移ろう。前にあげた批判のほかにも、フライは相当にマクルーハンを意識していたと見え、かれへの言及は、かなり多い。たとえば、「進歩の神話」（『現代の世紀』所収）では、「動的なものの方が静的なものよりいいとか、出来上ったものより過程がいいとか、有機的で活気のあるほうが、機械的で固定したものよりいい」と言った言

説が横行しているが、みんな間違っただけの価値判断を前提にして疑わない、と激しく批判していた。対置されている二項のうち、否定されている始めの方が、だけではないかも知れないが、主として年来のマクルーハン・テーゼであることは、改めて言うまでもない。そしてそこにある「……コミュニケーションの勝利は、コミュニケーションの死滅である。なぜなら、コミュニケーションが環境の全体を構成するようになれば、そこにはコミュニケーションするものはなにもなくなるからである。」

といった文章などは、たしかにマクルーハンにとどく、したたかな一撃ではあった。

しかし反面、「現代の神話」をつくっているのは、「新聞、テレビ、映画など……」の「マス・メディア」に支配されており、それらマス・メディアは、「基本的にはクリーチュと定型化した反応」から構成されている、とする分析もあり、マクルーハンと共約項がないことはない、のである。

フライの『決まり文句から元型へ』に対する全面的な回答は、1975年、ハーバート大学に客員教授として招かれて行った講演をまとめた『世俗的聖書：ロマンスの構造についての一研究』（1976年刊³³⁾）に、よく出ているように思う。それを見てみよう。

ここでフライは、物語の話法（“story telling”）の原則について分析しているわけであるが、とくに「ナイフでセンチメンタルなロマンス」を取出す。「ナイフなロマンス」とは、グリムのお伽話のようなフォークロアのことであるが、この発展した形態の散文として、フライは古代では、アプレイウス『黄金のロバ』などをあげる。近いところでは、コミック小説、ルイスの『マンク』などから、50年代以降のトルキン『指輪物語』から、サイエンス・フィクションまで、ここにふくまれるのである。今なら、「ハリー・ポッター」も当然入るであろう。

この種のロマンスの構造が、ギリシア、ローマの昔から、なん世紀たっても、ほとんど変わっていないことを、フライは「論証」してゆく。神秘的誕生、未来の運命についての予言、冒険、敵に捕えられて死の淵まで行くが脱出、ヒーローの本当のアイデンティティが判り、ヒロインとめでたく結婚する、といった構造的パターンで仕上がっていることが分析される。その枠内でのバリエーションはいくつもあるが、基本的な叙法の型は、変わらず、世紀をこえて繰り返し、なんどでもあらわれてくる。フライの有名な「元型」の説明を、これ以上おさらいする必要はあるまい。ただこの「元型」のなかに、拡大した「ロマンス」概念を位置づけようとしていることに、注意すべきであろう。

そしてフライは、このことを、もっと原理的に基礎づけようとする。どの人間社会でも、なんらかの「言語的文化」（“verbal culture”）を持っている。その中心に位置するのが、宗教、法、コスモロジーなどを伝える「神話的言語経験」と、周辺部分にあって、人びとを楽しませるもの、コミュニティの想像的欲求に答えるもの、つまり「架空の（“fabulous”）言語経験」と、人間社会の運行に必要な、二大「経験」が設定される。前の方の代表が西欧文明で

は「聖書」だとすれば、後の「経験」を形づくるものが、「世俗的」という形容詞がつく聖書、ロマンスということになる。ガリレオ以降、「神話」の宇宙像が通用しなくなり。「ロマンス」が新しい「神話」をつくることもあり、双方が交錯して、入り混じるいろいろな状況が生まれてくるのが、述べられる。「ロマンス」の分析で、どんなにある作家が「物語」を。独自に自分の頭のなかで考案したのだと思っけていても、それは「幻想」であって、材料・構成は「伝統的」なものを使っている。無意識的にも「伝統」の支配下にあるというところなどは、フライ年来の主張でもあるが、マクルーハンと共通している土台でもあった。

注目すべきなのは2つの関連で、フライが、「ポピュラー文学」を「社会学の郊外」に押しやらずに「文芸批評」の領域に入れるべきだ、と主張していることであろう。フライによれば、「ポピュラー文学」をみる二つの見方がある。一つの見方によれば、それは「パッケージされた商品」として、食品や薬と同じように売られているものであり、そこでは多くのものがロマンスの「恋愛と冒険」を「肉体的欲望と血への欲望」に変形してしまっている。しかし、もっといえば、「性」と「暴力」とは、ロマンスという文学形成の重大な要素ではある。また「ポピュラー文学」は、読者に最少限の言語的経験しか要求しない文学形式であり、その点では「フォークロア」に直接接続する。こうした諸点を伸ばして行けば、「ポピュラー文学」は、充分「批評」の枠内に入りうる、とフライは言うのである。

肝心なのは、フライがここで「エリート文学」と「ポピュラー文学」とは種類の違った二つの「文学」ではなく、同じものの二類型、同一の作家でも「エリートに傾いたり、大衆に傾いたりする」（フライの用語だと「神話」と「ロマンス」の間を往復する）と、みられていることである。そしてフライは、この「ポピュラー文学」こそ、前代の文学的「慣習」（“conventions”）を破って、文学の歴史を動かして行く徴表としてみるのである。ある時代には、ある文学形式上の「慣習」が支配する。過去の重圧が増大し、この「慣習」がすりへってしまった時、過渡期が訪れ、過去の「慣習」をふり捨てて、前面に出てくるのが「ポピュラー文学」だ、とフライは位置づけるのである。フライが、文学史上その具体例にあげているのは、十八世紀のゴシック小説出現の時期と、リアリズム小説没落以降の時期とである。その分析風景を細かに追うことは、フライの批評理論そのものをやっているのではない以上、ここではもう必要あるまい。

ただ、違うといえば決定的に違うのであるが、フライの「ポピュラー文学」概念が、マクルーハンの「クリーチュ」概念と裏返しに近接した役割を演じていることに、目をとめないわけにはいかない。フライの図式も。それなりに動くのである。

フライの「元型」（アーケタイプ）の由来は、もともと集合的無意識を認め、そこから必然的に出てくる人間「心のかたむき」をみる、カール・グスタフ・ユングの心理学であった。人間、どうあがいてもそこから脱けられない、あるいは「元型」で整序しなければ、原始の混沌にもどってしまうという一種のニヒリズムが、その底にはないことはない。マクルーハ

ンは、フライの批評理論を批判するなら、どうして「元型」概念を正面から批判しなかったのか。マクルーハンには、そうしたニヒリズムは無縁の筈ではないのか³⁴⁾。

フライとマクルーハンは、それぞれの軌道をまわる衛星のように、かぎりなく接近はするが、衝突しないで、また遠ざかって行く。

第五章 「擬似環境論」の批判と「視点なし」の立場

——一つのエポックの終り——

マス・コミ研究のもう一つの大きな基本テーゼで、マクルーハンが異った方向を辿ったものがある。ウォルター・リップマン以来の、「擬似環境論」(“pseudo-environment”)である³⁵⁾。人間は環境に「適応」して生きる生物であって、メディアはその作るイメージ複合体、「擬似環境」を、なるべく「環境」に近似的につくらなければならない。現代社会は複雑であって、現代人は生の「環境」のごく一部にしか、直接接触することは出来ず、大部分はメディアのつくる「擬似環境」に頼らざるをえないからである。言語学者ハヤカワ(『思考と行動における言語』)のメタファーを借りて「環境」=「原地」だとすれば、メディアは出来るだけ正確な「地図」を作成しなければいけないことになる。

この設定が、「環境」と「擬似環境」の比較、マス・メディア報道の歪み、といった大きな研究分野を開いたことは事実である。が、この図式を余り真面目にというか、機械的にとると、多くの悲・喜劇を生む。

プラグマティズムの基本概念である「適応」(“adaptation”)という用語に問題があるのかも知れないが、われわれは、毎日「環境」を調べて、「適応」を繰返して生活しているわけではないからである。日々の生活は型にはまって決りきっており、毎日「世界」を創造する必要はない。雨が降るかどうかは気になるが、総理大臣は誰かは知らなくとも、大方の生活は自動的に運行する。そのことで言えば、「擬似環境」の意味が、別次元で問われなければならなくなる。

外部に、確固とした「環境」があり、メディアはそれを「鏡」のように反映する(すべき)のだという思考は、マクルーハンには無縁であった。

「ニュー・メディアは、人間と自然の間の架橋ではない。かれらが自然なのだ。」「ニュー・メディアは、古い“本当の”世界へわれわれを関係づける道なのではない。かれらが本当の世界であり、かれらが古い世界の残っているものを、意のままに再構成しているのだ。」³⁶⁾

似たような発言はいたる所にあるが、別な意味での両世界論の否定と言ってもいい。このわれわれを取囲っているメディアの「世界」の外に、なにか「現実」があるわけではない。われわれは一つの世界、メディアの世界で生活する以外にないことの確認である。だが、同

時に次の発言もある。

「テレビの利用者にとって、ニュースは自動的に本当の世界となり、それは現実の代用品とはならないで、それ自体、直接の現実となるのである。」、あるいは「新聞の読者は新聞を現実となんらかの照応関係にある高度な人工的イメージだとはとらずに、現実そのものとして受取りがちである。」

みられる通り、マクルーハンは、そうした受け取りを、全面的に肯定しているのではない。外になにか「現実」を探しに行くのはおかしいにしても、メディアの構成法を分析しなくてもよい、ということにはならないのである。この「高度に人工的イメージ」の形成については、マクルーハンが、1953年『スワニー・レビュー』誌にのせた、「ジョイス、マラルメ、そして新聞」³⁷⁾が、重要な意味をもっている。

論文は「ポピュラー・プレス」が、芸術形式として、芸術家や詩人たちの熱心な興味を惹くのに、アカデミーの学者先生からは「陰うつ極わる不安」を浴びせられるのは、なんとも不思議な光景だという語から始まる。その意見の分裂は、一六世紀に活版印刷の「活字本」が出現した時の、評価の分解と似ているというのである。マクルーハンは、ロザリンド・チューヴの一七世紀形而上詩人、ジョージ・ハーバートを扱った研究をひく。ハーバートの奇抜な比喩（“conceits”）が、中世末民衆の絵画的イメージを、言語に翻訳したものだという分析である。マクルーハンの言え、ハーバートらは絵画的イメージの時代から、活字本への転換の時期、に位置していたということになる。それと逆の交替期が、今進行しているのではないか。活字から、新しい絵画的「技術」への逆進がいま始まっているのではないか。とすれば、もっとも大衆的な媒体「ポピュラー・プレス」が、どんな影響を芸術的形式にあたえているか検討する必要があると言うもので、舞台の文脈は、大きく設定されている。

そのなかで、ディケンズが、ボードレルが、マラルメが取上げられるわけである。もとより、マクルーハンは、マラルメ（新聞の手法に好意的発言が多いのは事実）と「ポピュラー・プレス」が開拓した手法が並行しているとみるわけであるが、「事実」を描写するリアリズムなどの方法が似ているというのではない。あくまで、背景にかくれている意味を、「読者」が努力すれば、それなりに浮び上らせることが出来る、象徴詩と新聞は共通していると見てに過ぎない。「新聞」が「事実」の塊りだという思考は、マクルーハンにはない。その上で、「新聞」がライター個性を消し去り、インパーソナルなスタイル——サンボリズムの——「目標」を助長させることなどに注目したのである。

「ポピュラー・プレス」の手法が、芸術形式を先取りしているというマクルーハンのテーゼで、最も注目されているのは、首脳同志の外交交渉から、スターの離婚、銀行強盗といった犯罰記事まで、同一平面上に圧縮、「並列」（“juxtaposition”）の技法である。異った人間経験、異なった空間、を「並列」することが、小説の技法と並走しているのだ、という分析が続く。異ったイメージ、異なった階級の社会経験を「並列」することで、フィールディン

グヤスマレットの小説は、構成されているとみるのである。マクルーハンの用語で言えば、「新聞的」(“newspaperwise”)なのである。一つの頂点は、同じ心(意識)の異った状態、想念が、ズラズラと「並置」されるに至る、スターンの『トリストラム・シャンディ』だ、ということになる。この方向にそって、ジョイスの『ユリシーズ』などが分析されてゆく。それについては、余り言葉を費す必要はあるまい。たとえば『ユリシーズ』は、1904年6月16日という「短い時間のなかに」、すべての空間の経験を圧縮している、と言うのである。

ずっと後年の『王様の新しい服』でも、マクルーハンは次のように言っている。

「印刷された言葉は、公衆(“public”)を創造した。公衆は、おのおの自分の観点をもったバラバラな個人から構成されている。電気的回路は、公衆を創造しない。それは大衆(“Mass”)をつくり出す。大衆はバラバラの諸個人から構成されているのではなく、相互に深くからみ合った諸個人からなっている。このからみ合いは、数のためではなく、スピードのためである。

日刊新聞は、この事実の興味深い実例である。日刊紙にある各項目は、全く非連続的で、全く関係がない。唯一、すべてのものを統一する新聞の特徴は、日付である。その日付を通して読者は、アリスが『鏡を通り抜けて行った』ように、行かなければならない。一度その日付をこえて行けば、その項目の世界にまき込まれ、かれ、読者は、その各項目について物語の筋を書かなければならなくなる。かれが、推理小説の読者がプロットをつくるように、ニュースをつくるのだ。

「筋」をつくり易いように誘導する、いろいろなジャーナリスチックな技法が開発されているわけであるが、その方向にマクルーハンの興味は、伸びないようである。かれの視点が全く変わっていないことは、明瞭であろう。この地平から、活字の、映像の、具体的な構成法に入っていくならば、メディア・ジャーナリズムの活動という広い舞台に出て行くことが出来た。しかし、マクルーハンは上を滑って「世界」の構成法から、また一般的な「視点」(“point of view”)の問題へ移行してゆく。一見、問題を普遍化するとみえて、その実袋小路に入っていくコース、ではなかったのか。

多くの批評家を悩ます、マクルーハンの「パースペクティブ」の排撃(“no-point of view”)について、少し別な角度から迫ってみよう。

マクルーハン発想の源泉の一つと言ってもよいギディオンは、1948年に『機械化が支配するようになる：匿名の歴史への一貢献』、という本を出した³⁸⁾。農業の「機械化」から、家の「機械化」(とくに台所と風呂場)まで、中世から20世紀前半までの「機械化」の歴史を辿ったこの本は、「いかに機械化が人間の内部存在に浸透しているか」の例証として、芸術的製作における「機械化」の影響をも、日常生活次元とあわせて取扱っている点に特徴があった。そこで出てくるのは前衛芸術にみられる、多次元に「空間」を分割する、対象に

多方面から視線を集めるといった、キュービズムの手法である。

このことをもっと一般的な歴史記述にまで拡大すると、「歴史の意味は、諸関係をあらわにすることから始まる。……こうした諸関係は、視点（“point of view”）を移すことによって変えてみえる。丁度、星座のように、たえず変化しているからだ。歴史叙述は雲に、いつも断片につながれている。知られている事実は、しばしば天空の星のように広く散らばっているからである。」

そのあたりから、『グーテンベルクの銀河系』という題名が由来するのではないかと、思われる。が、そうした推測はともかく、ギディオンのこの視点を拡大、極限化して行けば、ルネッサンスが確立する「パースペクティヴ」思考は、一つの視点からしか対象をみない、活字文化の産物だ、というマクルーハンのテーゼになる。しかもこれからは、電気の光が四方八方から来るように、「視点なし」（“no-point of view”）で対象を見なければいけないのだ、という命題に伸びて行くのである。あるいは、マクルーハン年来の手法である、モンタージュが、そこに合体して来るといってもよい。しかし、揚げ足を取るようだが、「視点の多様化」と「視点なし」とは、やはり質的に違うのではないか。「多様化」だけならば、ピカソの絵のように受けとり可能であろうが、「視点なし」に「同時的」に見るということが、人間に可能なのであろうか。どう表現すればよいのか。言語表現だけでは不可能であり、非言語的表現を混用しても、どんな形態でありうるのか、明瞭な輪郭は必ずしも浮び上ってこない。が、マクルーハンは、その近似値にでも、なんとか辿りつけると信じていたようである³⁹⁾。かれの、写真、絵、マンガをふんだんに入れ、活字の大きさもいろいろに変えた小型本、『メディアはマッサージである』などは——面白い読物ではあるが——そうした表現できないものを表現しようとする、悪戦苦闘の産物としても見る事が出来る。ある批評家のいう、マクルーハンは「本」を否定するために、「本」を書いているといった自己矛盾が、そこにも見られないことはない。

最後に、復活、再評価の気運もあって、かれの息子エリック・マクルーハンが編集して1988年に出版した『メディアの法則：新しい科学』⁴⁰⁾について触れておこう。この本が、マクルーハンが残したかなり完全な原稿を「編集」したものとすれば、それは、かれの言説が「擬似科学」だという批判を意外と気に病んで、それに反論しようと努力していたかをうかがわせる、ドキュメントではある。

しかしこの本、マクルーハンの諸テーゼが、ひどく単純化して並べられており、一種の骸骨でしかない。一つの理由は、ここで「分裂した脳」（“split-brain”）の仮説が、全面的に採用されていることである。「左脳」は直線的、あるいは「視覚的」（“visual”）な機能をつかさどり、「右脳」は全体的な、「聴覚的」（“acoustic”）な部分の支配者だ、とするのである。そう生理学に基礎を置けば、マクルーハン「理論」は不動のものになると思われたのかも知れないが、これまでの感覚系のバランス論と似ているようであるが、全く質と次元の違った

ものになってしまう。

「法則」は、スピノザの『エチカ』ではないが、いくつかの命題にまとめて呈示されている。

「1. すべての技術は、その使用者のある器官、あるいは能力を拡張し、拡大する。

2. 諸感覚(“sensibility”)には平衡があるので、経験の一分野が高められ、強度化される時、ほかの分野は減少し、あるいは麻痺する。」

こうしたものが並ぶのである。ジュディス・スタンプスのように、ナンセンスなトートロジーの羅列、とみるのは酷評に過ぎるであろうが、こうした命題を「論理的」に証明してゆくのは不可能であり、『ゲーテンベルクの銀河系』のような、一種の「歴史的」証明しか出来ないと思われるが、それはないのである。マクルーハンの愛用したアナロジーを使えば、この本、著るしく硬直化したスコラ哲学に似通ってくる。と言ってもよい。あれほど「静態化」を嫌ったマクルーハンの思想をこんな形で整理してしまうと、かれの動いて止まない探求精神の大部分は、どこかに消えてしまうのではないか。

マクルーハンは、70年代の前半に、しきりと「コミュニケーション理論」がないことを気にしていた。その「理論」形成の一環として、プラトンからエズラ・パウンドにおよぼヨーロッパ思想家のコミュニケーション論を抽出し、まとめ、シリーズとして刊行する計画をもっていた。マクルーハンの企画をかなり具体的に、ハーコート・ブレイス社のウィリアム・ジョヴァノビッチと相談し、総編集者にはウォルター・オングがいい、などと言っている。この大企画、いろいろな理由で実現することはなかった。

いわゆる「コミュニケーション理論」は、探すまでもなく、あそこにも、ここにも、どこにもあるが、マクルーハンが晩年、ない、ないといって求めていたコミュニケーション「理論」は、どういう次元のものであったろうか。自分のそれまで構築して来た、ほとんど閉じかかっている(別に言えば、完結しかかっている)メディア理論で、どこがいけないのか。企画したシリーズにしても、プラトンを除いて、ほとんどが「直線的」思考の産物ではないか。そんなに歴史に囚われることは、ないのではないか。自分の体系のどこに不満を覚えたのか、覚えなかったのか、それは判らないが、私にはどうもマクルーハンに、もう一度自分の体系を再構築しようという意図があったように、思えてならないのである。

あれほど喋り好き、理論的にも「対話」の価値を高く位置づけた男が、病気のため言語能力を失う。伝記によるとマクルーハンは、船長が難破した船の残骸を見に行くように、ゴミの山と化したトロント大学の「文化・技術プログラム」の部屋を——大学当局によって閉鎖される——友人の助けを借りて訪ね、泣いていたそうである⁴¹⁾。

マクルーハンは、1980年12月の最後の日、ベッドのなかで死んでいるのが見つかる。

注—————

1) リチャード・キャベルは、ルフェーブルにマクルーハンの影響があるとみている。ある高名

なアメリカの批評家が「影響」(“influence”)という言葉は、余りに曖昧かつ多義的で以後使わないことにしようと言う、以降反対意見もなかったが、誰も守らない提言をした。キャベルの意味もさほど明瞭ではないが。

Richard Cavell; *McLuhan in Space: A Cultural Geography*, 2002, University of Toronto Press.

- 2) Stephen Kern; *The Culture of Time and Space, 1880-1918*, <6. The Nature of Space>, 1983, Harvard University Press.
- 3) デュルケム著・古野清人訳『宗教生活の原初形態』, (上) (下), 岩波文庫。
 Woef Lepenies; *Between Literature and Science: The Rise of Sociology*, (I France), 1988, Cambridge University Press. 元はドイツ語で, *Die Drei Kulturen*, として 1985 年に Carl Hanser Verlag から出版されたもの。
- 4) Rene Worms のやっていた “*Revue Internationalé de Sociologie*”, 1896, (4)。1980 年に Raymond Trousson が, この “Fragment d’histoire future” を複製している。タルドの社会学は基本的に単純で, 「発明」する少数のエリートと「模倣」する大衆とから構成される。
- 5) マッハの著作は以下のものが翻訳されている。広松の貢献は大きい。
 エルンスト・マッハ, 須藤吾之助・広松渉訳『感覚の分析』, 1971 年, 法政大学出版局。野家啓一編訳『時間と空間』, 1977 年, 法政大学出版局。広松渉・加藤尚武編訳『認識の分析』, 1971 年, 法政大学出版局。
- 6) シンボルの発生との関連でみている, カツシラー著・宮城音弥訳『人間』(岩波文庫)の分析, 参照。
 木田元は, ハイデッガーの「世界内存在」という規定がユクスキュルから来ているのではないか, と言っている。多分そうであろう。木田元『ハイデッガー「存在と時間」の構築』, 2000 年, 岩波現代文庫。
- 7) 意図したジャコバン・クラブのような「開いた」組織にならずに, 十六世紀のジェスイット集団に似た組織構造をつくってしまう一因はそこにもあるのではないか。
 永田廣志『現代唯物論』, 第三章「マッハ主義との闘争」, 1946 年, 三笠書房。私の使っているのはこの版であるが, 戦前の“唯物論全書”版と, ほとんど変っていない。
- 8) Fernand Léger, “The Origins of Painting and Its Representational Value”, in (ed) Edward F. Fry; *Cubism*, 1966, New York.
 「パースペクティヴ」の問題を扱った先駆的な仕事は, Erwin Panofsky “Die Perspektive als Symbolische Form”, *Vorträge der Bibliothek Warburg* (1924-25)。
- 9) Erwin Panofsky, “Style and Medium in the Motion Picture”, in (ed). Daniel Talbot; *Film: An Anthology*, 1969, Berkley.
- 10) マンフォードは, 久野収が好きで, 岩波新書で翻訳・紹介している。一つは『人間——過去・現在・未来』(上・下)。マンフォードは, ここで人間を環境を支配する「プロメテウスの側面」と他人とコミュニケーションする「オルペウスの側面」の動的統一として, とらえている。「訳者のコトバ」で, 久野はマンフォードを三木清や林達夫に並べるのはよいとして, 戦前の H・G・ウェルズ(『世界史概観』)が果たしたのと同じ役割を本書に期待している。そういう「受けとり」だったのかと思うが, いまから見れば, いささか奇妙な組み合わせではある。
- 11) M. McLuhan, “Environment as Programmed Happenings”, in (ed). Walter J. Ong; *Knowledge and the Future of Man: An International Symposium*, 1968, Hoet, Rinehart and Winston.

Jacques Lusseyran; *And There was Light*. マクルーハンが影響を受けた本をもう一つあげるとすれば、George von Békésy; *The Spatial Attributes of Sound*, 1930.

- 12) Gordon A. Gow, "Making Sense of McLuhan Space", p. 199, in (eds). J. Moss, L. M. Morra; *At the Speed of Light There is Only Illumination: A Reappraisal of Marshall McLuhan*, 2004, University of Ottawa Press.

- 13) この最終報告、スコルニアは有意義だったと評価しているが、組織の全体では、時間の無駄だったという評価が多いようである。なによりも実用的でないということが、決定的だった。

W. Terrence Gordon; *Marshall McLuhan: Escape into Understanding. A Biography*, pp. 179-190, 1997, Basic Books.

- 14) トム・ウォルフは、シャルダン (Teilhard de Chardin) ではないかと言っている。このジェスイットの地質・古生物学者は「神経系」が外在化し、ネットワークをつくって意識が融合し、「一つの文明」が出来ることを夢想していた。「世界村落」と似ていなくはない。ただ、教会から、たえず「異端」だとして疑いをかけられていたため——トロント大学のマクルーハンのカレッジではシャルダンの「原稿」が出まわっていたというのは事実らしい——公言できなかった、とウォルフは見ている。

Tom Wolfe, "Foreword", pp. 17-19, in (eds). S. McLuhan, D. Staines; *Understanding Me: Lectures and Interviews*, 2003, Tronto.

- 15) ここでは James Strachey の翻訳した英訳本を使う。

Sigmund Freud; *Civilization and Its Discontents*, pp. 42-45, 1961, W. W. Norton & Company.

- 16) ここでこの「神話」解釈の判定をする必要はないが、近年も岡田尊司『自己愛型社会：ナルシスの時代の終焉』(平凡社)という新書が出ているから、やはり日本でもマクルーハンとは反対の解釈が多いのであろうか。

- 17) マルクス主義の立場からの批判的検討として、斉藤日出治「メディアの物神性と感覚革命」、『思想』, No. 775, 1989年1月号所収。

- 18) この中世紀における理解の移動は中村雄二郎が、『共通感覚論』で、詳細に述べている。マクルーハンとトマス・アクイナスとの違いは他にもあると思うが、ここでは取扱えない。

この関連で、Denys Thompson, "A Cure for Amnesia", *Scrutiny*, 1933, 2.

- 19) マクルーハン、テレビは余り見なかったようである。時期によって違うが、少なくとも日常的視聴者ではない。別にマクルーハンの「理論」に、直接影響するところはないであろうが、記録しておく必要はある。知性の「映画的手法」について、『哲学入門』でも、『創造的進化』でも、大いに分析したベルグソンが、終生映画館に足を踏み入れなかったのと、同様かも知れない。

- 20) ダン・ヤポンの実験は、ある感覚様式を通じて、人がいかに早くそのもの——たとえば長方形——を認識するか、といったことから始まる。

W. Terrence Gordon, op. cit. pp. 205-215, 参照。カポンの実験は各感覚の特性は明らかにしたが相互作用は解けない。

1970年、全米世論調査協会の大会で、当時ジェネラル・エレクトリック社の調査スタッフだったハーバート・クルグマンが、1つの実験結果を発表した。クルグマンは、女性秘書(22歳)の後頭部に電極をつけ、雑誌のコマーシャルを読む時と、テレビのコマーシャルを見る時との脳波を測定したのである。活字を読む時それは「高く」、映像を見る時、波は「低く」か

った。これを、どう解釈するかは問題だが、クルグマンは「メッセージ」より「メディア」の違いが、この実験で裏づけられたと解釈し、報告の後ある記者に、「私は計画しなかった旅に出てしまった。マクルーハンの仮説を確証することになるとは夢にも思わなかった……」と語ったのである。マクルーハンはこれを見て非常に喜び、数年間クルグマンと文通を続けている。これもトロント大学の「実験」と同巧異曲だと思われるが、マクルーハンはどうして具体的通路になる「メッセージ」への道を閉ざして、抽象的形式だけに固執したのか。この次元でのマクルーハンは、明らかにモダニズムの一派、フォーマリストの相貌を呈している。

- 21) この本については、後藤和彦「マクルーハンの生んだ幻想『ビジネスマンのバイブル』の正体は？」、『朝日ジャーナル』、1967年10月8日号、所収。
- 22) C. P. Snow; *The Two Cultures and the Scientific Revolution*, 1959, Cambridge University Press.
- 23) F. R. Leavis; *Two Cultures ? The Significance of C. P. Snow, Being the Richmond Lecture, 1962. With a New Preface for the American Reader*, 1963, Pantheon Books.
- 24) F. R. Leavis, "Luddites ? or There is Only One Culture" (1966), in *Nor Shall My Sword: Discourses on Pluralism, Compassion and Social Hope*, 1972, Chatto and Windus.
- 25) Thomas H. Huxley, "Science and Culture", in *Science and Education: Essays*, 1893, D. Appleton and Co.,
- 26) Mattnw Arnold, "Literature and science", (ed). R. H. Super; *Complete Prose Works of Mattnw Arnold*, vol 10, 1974, University of Michigan Press.
- 27) Levin Schüiking: *Soziologie der Literarischen Geschamacksbildung*, で、ふつうにあってそんなに悪い本ではない。戦後英訳も出ている。リーヴィスの意見については、F. R. Leavis; *A Selection from Scrutiny*, 2 vols, 1986 Cambridge University Paess, を見よ。
- 28) H. G. Wells, "The So-called Science of Sociology", *Sociological Papers*, 1907. 3. Wolf Lepenies; *Between Literature and Science: The Rise of Sociology*. 〈5 The Utopian Novel as a Substitute for Sociology: H. G. Wells〉.
- 29) Susan Sontag, "What's Happening in America", in *Styles of Radical Will*, 2002, Picador USA.
- 30) Northrop Fry, "Communications", *The Listner*, 1970, 7月9日号。マクルーハンの反論, "Views" は同誌, 1970年10月8日号。編集部でアレンジしたものであろうが、2台のコンピュータが向き合っているマンガがついており、1台のコンピュータが相手に「最近にかいい本を書いたかね」ときいている。
- 31) もう一つの批判をあげておこう。

ウェールズの小さな町に生まれ育ち、余りうまくはない『ボーダー・カントリー』という小説も書き、一生“地域性”、そこでの生活経験を大事にしたウィリアムスにとって「世界村落」と言うのは、我慢のならない表現であったとみえ、次のようなやや過度に真面目すぎると思われるような批判を加えている。

「現代のコミュニケーション内容の大半は、直接目に見え、移り変って行く世界の諸関係への、この種の代替物である。……それは単なる一連の技術セットではなく、共有された意識の一形態である。そして、意識の一形態である以上、『世界村落』といったレトリカルなアナロジーで理解されるべきではない。どんな種類の村、あるいは定着した活潑なコミュニティに暮す経験も、それに似たものは、ほとんどないからである。それは主として、たえず繰り返される外部の出来ごとについての、不均等に共有された意識の一形態として使われる。それが、はつき

りと目に見える関係はないが、同時にわれわれの生活にとって中心的だとか、周辺のだとか感ぜず、強力に伝達され、媒介されたこの世界で、おこりうることだと思われる。」

Raymond Williams; *Television, Technology and Cultural Forms*, pp. 295-6, 1974, Schocken Books.あるいは、同著者による、*The Politics of Modernism*, 1989, Verso.

- 32) Marshall McLuhan, Wilfred Watson; *From Cliché to Archetype*, Viking.

しかしこの対談本、事前によく打合わせ、お互に役割を決めて始めるのであるが、本番ではマクルーハンがそれを無視して勝手なことを喋り、結局「対話」ではなく、モノログが二つ並ぶという奇妙な「本」になっている。それが、マクルーハンの病気による物忘れのせいなのか、そこでワットソンの言ったことが気に入らなかったせいなのか、関係者にもよく判らなかった模様である。

- 33) Northrop Fry; *The Secular Scripture: A Study of the Structure of Romance*, 1976, Harvard University Press.

明らかにここでのフライは1957年の本、*Anatomy of Criticism*, (Princeton University Press)の三番目のエッセイ〈Archetypal Criticism: Theory of Myths〉からずい分変化している。

- 34) レントリキアは、フライをモダニズム末流の神話派、マクルーハンを『終末の感覚』のフランク・カモードと一緒にフィクション派——このフィクション派どうもよく判らぬところがあるが——の対立、つまり同系統内部の対立とみる。Frank Lentricchia; *After the New Criticism*, 1980, University of Chicago Press.

- 35) 角知行「擬似環境論再考」、『天理学報』、第百六十六輯（平成3年2月）。従来の「擬似環境論」に大きな修正を加えようとした重要論文である。

- 36) (eds). Erik McLuhan, Frank Zingore; *Essential McLuhan*, pp. 272-3, 1995, Basic Books.

- 37) “Joyce, Mallarmé, and the Press”. 同様に詩の「心像風景」で、異った対象、異った経験を並列・対置してあることの意味を論じた論文をあげておく。

“Tennyson and Picturesque Poetry”, *Essays in Criticism*, I, 3 (1951, July).

なお、この論文も「ジョイス……」も、*The Interior Landscape: The Literary Criticism of Marshall McLuhan*, 1969, McGraw Hill. に収められる。

また、マクルーハンの名前をあげて、かれのジョイス「解釈」を批判している論文もすでにある。かれの「解釈」が、かなりマクルーハン流になっていることはたしか。

Denis Donoghue, “Joyce and the Finite Order”, *The Swanee Review*, Vol. LXVIII, No. 2 (1960, Spring).

- 38) 再版が Siegfried Giedion; *Mechanization Takes Command: A Contribution to Anonymous History*, 1970, Oxford University Press.

- 39) Samuel L. Becker, “Viewpoint: McLuhan as Rorschach”, *Journal of Broadcasting*, vol. 19, No. 2 (1975).

- 40) Marshall and Eric McLuhan; *Laws of Media: The New Science*, 1988, University of Toronto Press.

エリックが書いた「序文」を見ても、マクルーハンが『メディアを理解する』の新版を出すため、十数冊の原稿をとじたフォルダーが残っていたことは判るが、「編集」の経過、内容は判らない。

- 41) Philip Marchand; *Marshall McLuhan: A Biography*, pp. 241-247, 1998, The MIT Press.

(田村さんは停年後も、ラオス高地民族の調査に行っておられたと聞いているが、私が知り合った頃は“ミニコミ”の調査で日本列島をかけまわっておられた。二〇世紀の60年代と、余り変わっておられないようである。

60年代に苦勞して読んだマクルーハン——全く読みにくい人——についての論文を、少し出しおくれの証文のような気がしないでもないが、献上したいと思う。)

付 記

夫香内三郎は、体調をくずし急遽入院いたしましたので、この校正が出来ませんでした。やむをえず私が替っていたしました。原稿に忠実を旨といたしましたが、なにぶん不慣れな事故、不備な点があると思います。本人が校正すれば、若干の修正があったかも知れません。

何卒ご容赦、ご理解下さいますようお願い申し上げます。

(香内信子)

